

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03)3337714 649

FAX(03)32999153 667

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額600円 6ヵ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言

夫たちの地元J.R復帰こそ解決の条件

千葉 真貴子……………2

参院選勝利が大田知事三選の第一歩

上野 建一……………3

—新社会党推薦の鳥袋候補陣営燃える—

虎の尾を避けて

町田 一男……………4

—大資本に見る障害者就労の現実(下)—

ローザ・ルクセンブルグ／ベルンシュタイン論争から百年

伊藤 成彦……………7

—ローザ・ルクセンブルク、シカゴ会議での挨拶と問題提起—

「弁証法」の駆使!

佐々木 守雄……………12

—いまなぜ、ローザか?— 第九回国際交流参加—

「五・二八判決」は司法の自殺

佐野 周二……………15

—雨の中、国労支援の地域集会—

読者からのおたより

……………15

# 旬刊 社会通信

NO. 708

一九九八年七月二一日号

一九九八年七月二一日発行  
(毎月一日・二一日・二二日三回発行)

## 夫たちの地元JR復帰こそ解決の条件

この十二年、私達は、苦しい生活の中で、何度となく、この生活から逃げ出したいと思つたことがあります。消えることのない不安に押しつぶされそうになったこともありました。しかし、その度に仲間と話し、励まし合いながら、困難な状況も乗り越えてくることができました。

五月二十八日は、大きな期待をふくらませないよう、気がまえば持つていたつもりでしたが、あまりにも非情で常識では考えられない、不当な判決に、自分の目と耳を疑い、頭の中は真っ白になってしまいました。重い空気が自分を包み、沈みそうになる気持ちをおさえるのがやっとでした。また、私達以上に、心を痛めたのは、子供達だっと思ひます。どういふ判決が出されるのか、という不安をもちながら、きつと、お父さんの正しさが認められると信じ、子供同士でも話をしていたり、テレビをくい入るように見つめお父さんがかわいそうだと涙を流した子供。親元から離れ生活している子供からは、「仕事も手につかず、やっとニュースで知った時、悔しくて涙がとまりませんでした。駅で働く父の姿を思い出すと、一日も早くJRに戻ってほしいと思う」と書かれた手紙が届きました。また地域の中や、アルバイト先でもなんでこんな判決が出されるのかと怒りの声が高まっています。

闘争団には、共に闘い、支えて下さっている全国の仲間の皆さんから、怒りと、力強い励ましの言葉が次々と送られてきています。その一言一言にこめられている皆さんの思いを考えた時、私達の十二年の重みをあらためて気づかされました。不当な差別・選別によって、屈辱的な扱いを受け、なまけ者のレッテルを貼られ、ボロきれを捨てるように、二度目の首切りを強行し、逃げ去った当局の後ろ姿は決して忘れません。

小さな子供達が必死で、「お父さんをJRに戻して下さい」と訴える声や、「ガンバロウ」と雪の中でほつぺたを真っ赤にしながら小さなこぶしを上げる姿が今でも残っています。病で倒れた仲間、無念な思いのまま他界した仲間も多くいます。

十二年で味わってきた、悔しさ、辛さ、悲しみは語りつくせないほどです。本当に腹の底から怒りがわいてきます。淋しさや、ガマンの中でも明るく素直に成長してくれている子供達や、心配をかけ続けている年老いた親達をも巻きこんだ闘いであることを思うと、ここで立ち止まるわけにはいけません。

不当な判決に屈することはできません。そして認めることも決してできないのです。今後様々な形で惑わされるようなものが出されると思ひますが、この十二年の闘いをムダにするような解決を私達は望んでいませんし、私達は夫達の地元JR復帰なくして、闘争を終えることはできません。心から夫や仲間と共に闘ってきて良かったと言えるよう最後まで頑張ります。

(音威子府家族会・千葉 真貴子)

(注) この稿は六月二五日、東京・日比谷野外音楽堂でおこなわれた「JR東日本に責任あり！中央総決起集会」で闘争団家族を代表して表明された「決意」です。この集会では石油、船員労働者が国鉄闘争勝利には「生きた労働者のつながりをつくる」と訴えた。

## 参院選勝利が大田知事三選の第一歩

—新社会党推せんの島袋候補陣営燃える—

自民党を先頭とする改憲派は、十一月の沖縄知事選に、大田昌秀知事を引きつりおろそうとかねてから画策してきたが、参院選前からそれが表面化してきている。いいかえれば、自民党は参院選を通じて知事選に有利な条件をつくらうとしているのである。

その第一は、まず参院選で知事与党であり、大田知事を国会で支えてきた島袋宗康社会大衆党委員長（現・新社、共産、社民推せん）を落とそうと、金権選挙を展開している。島袋候補に対抗している自民党の公認は西田健次郎候補（元県会議員・五四歳）であるが、彼は学生時代に日本思想研究会の行動隊長であったという。この行動隊は一九六〇年代末には当時の沖教組の書記長を襲ったり、社大党本部の焼き討ちをやったりした行動右翼である。四年前の沖縄市長選では革新の新川市長候補に対立して惨敗している。その後県議補選で県議会に復帰、一貫して右翼的反革新、反大田知事の言動を続けているのである。そこから今の参院選では沖縄の革新・護憲派は、「西田だけは当選させてはならない」の合言葉で頑張っているのである。

第二には、上原康助・社民党衆議院議員を大田知事の対抗馬として立候補させ、大田支持勢力の分断をはかろうという自民党の戦術に上原氏は乗り出したのである。上原氏は参院選直前に社民党を離脱（離党）した。土井・社民党もだらしのないものである。旧社会党のお陰で細川内閣での大臣（北海道・沖縄開発庁長官）をやらせてもらったのに、後足で砂をかけるような参院選直前の離党に除名もできないのである。

上原氏は「全駐労」の出身であり、その全駐労は民主党支持である。沖縄に足場のない民主党は連合・全駐労の支持を頼りに票を伸ばそうとしている（今度の参院選は比例区で）。民主党は知事選への対応を決めていないが、安保と自衛隊を容認すること、新ガイドライン推進では自民党と変わりないのである。そのため上原氏は自民党だけの推せんでは、今までの立場上からも具合が悪い（あまりにも明白な転向になる）ということと、「渡りに舟」とはこのことか、連合と民主党を隠れみのにして自民党の擁立に応じようという計算である。上原氏は全駐労と共に比例区で沖縄から民主党の票を多く出して自らの存在感を示そうとしている。

砂をかけられた社民党のイメージダウンは避けられない。社民党が安保と自衛隊を容認していることによって上原氏のように、より現実的に基地への対応を求める議員がさらに出る可能性がある。いわば村山内閣以来の、基本政策の転換で自民政権と結託してきたことによる「後遺症」といえるのではないか。自民党は、これで一層自信を持って推してくるであろうし、民主党も具体的に上原氏側との協力関係を深めようと動き出している。

しかし沖縄における反基地、反安保のたたかいは、上原氏を裏切りと見ており、彼が知事選出馬の方向を強めれば強めるほど孤立化することになりかねない。

島袋参院候補の二十五日の出陣式には、比例で民主党を推せんしている全駐労の三役がそろって参加して大田知事と共に島袋候補を支援している。十一月の知事選は始まっている。新社会党の推せんする島袋候補は何としても勝たねばならない。（上野 建一）

## 虎の尾を避けて

—大資本に見る障害者就労の現実(下)—

多くの犠牲者ができますよ

二月二十七日、課長に呼ばれた。「契約更改の事前話しをしていると聞いたけど……」  
「そうですが」「オレも人事部長、担当役員に交渉しているのだが」「誰が頼みましたか？  
わたくしは頼んだ覚えはありません」「いや、君の事を思つて……」「わたくしの気持ちを持  
申し上げて良いですか」「良いよ。」「有り難うございます。子どもの歌の例えで恐縮です  
が、どんなに上手に隠れても、課長の足は見えています。今まで何をなさいましたか。表と  
裏で」「それは、君の誤解だ」「都合の悪い時は、何時もそう仰いますね。もう、良い加減  
にしろ」罵声を吐いて席を立った。五分後、青ざめた顔の課長が部屋から出て来た。

三月二三日、部長は条件を提示した。「昨年の年収は最低保障する。それに今回から、  
成功報酬を決めて文章とします」「成功報酬の基準は？」「次回提示する」。

三月一七日、部長は成功報酬の条件と、過去の販売実績のシュミレーションを提示した。  
「基数の引下げは可能ですか？ 基数越えの単価の引き上げは可能ですか？」「どこが妥当  
な線か分からないから、これでしばらくはやると言う事で……」。「では、月例賃金を上げ  
て戴きたい。昨年暮れのボーナス時、会社が赤字または大幅な収益減だから払えない。会  
社として、ボーナスは収益対応との説明を受けたのですが、社長のメッセージでは、今期  
は当初予算より減つたとは言え、五〇億を超える黒字と、六〇億を超える収益見通しが出  
されているではないですか。二月一九日のお話して、身分はわたくしとしてはかかわりま  
すが、特別専門職の件は状況が来るまで待ちますよ。しかし、これまで少なくとも四年以  
上、会社は嘘に嘘を重ね、課長はやりたい放題・言いたい放題。このような状況に、会社  
として責任を取つて戴きたい」「判りました。人事に伝える」。

三月二十七日、人事課長の面談があつた。「仰つている事は分かりますが、今回は成功報  
酬ができた事ですし……」、ダメです。今までのわたくしに関する課長らの態度。会社の  
対応を見逃すわけには行きません。なぜなら、わたくしは自分だけがこのような扱いを受  
けているなら、入社以来、配属先が悪過ぎたと笑つてもいれませんが、この会社で働く多く  
の障害者が、わたくしのような扱いを受けているのです。会社は、福祉の街作りとか、障  
害者用システム開発を社会に発信していますが、社内は何ですか。これが社外に出たらど  
うしますか？。「痛手があります。困ります」「でしようね。ならば、社内の障害者に対  
する扱いを変えるために、一年一回一時間だけで結構です。部課長に対して、障害者の人  
権講座を開いたらどうですか？ すぐに効果は出ませんが、何年か後に、社内の障害者苛  
めや差別はなくなり、会社のカルチャーは、大きく変わりますよ。行政からも、そうした  
指導が届いているでしょう。」「届いています」「なら、やつて下さいよ。講師が必要なら、  
課長のお話しに沿う講師をご紹介します」「分かりました」。「だから、月例賃金のアップ  
との相殺はありえません。このお願いの中には、わたくしのこれまでの思いと、社内の障  
害者の思いが入っています。それに、二月二十七日、直属の課長に対し、今回の契約更改で  
は、買い叩きや口先だけの話には乗りませんと伝えてあります」「私はその話しは……」

「では、尋いて下さい。もう一度、検討して下さい」。

四月一七日、人事課長との再度の面談。「月例賃金の件は、成功報酬で見ると言う事でどうでしょうか」「具体的には?」「前と変わりません」。「それ、何ですか。わたくしの話しに高をくくっていませんか? 成功報酬で見ると言う事は、基数を下げるとか、単価を上げるとかを言うのではないですか? 何もなくて、面倒を見るの空手形に、もう騙されません」。「騙しているわけではないですから……」。「と云いながら、騙し続けたのが会社の姿勢です。そう言う話しはもう信じません」。「それは困りました」。「そうでしょうか。会社は、他の嘱託障害者の僅かなベースアップのお願いを無視し、職場環境の改善をお願いしても無視し続けて来ました。わたくしはこう言う姿勢を、月例賃金のアップに込めていきます。わたくし達の賃金体系もなく、たえず会社の恣意的な姿勢を押しつけられていたのですからね」。「そう言う訳ではありません」。

「ならば、嘱託障害者の賃金体系表を出して下さい」「それは、……」「ないんですよ。いつも、いつもそうなんです。その場限りの一時的な言い逃れで済ませようとする。わたくしも今、これまでの事を下に言わなければ、言える者が言える時に言わなければ、二度と聞く耳を持つて戴けないですからね」。「いや、そう言う事はないです」。「ででしょうか」「わたくしが受けた相談の中から、障害者全員に該当する事の具体的事例を、本人が判らないように出した。」「もう一度、検討して下さい。今日は契約更改が出来ると思って印鑑を持参して来たのですが……」と席を立った。

四月三〇日、三度目の人事課長との面談。「前回までの話を検討して、基数を下回った場合の成功報酬の条件で納得して戴きたい」。「話しは少し前向きで、その事は評価します。しかし、わたくしの切なるお願いとは、違います」。「固定費を、人件費の高騰はしないと云う経営会議の決定もありますから」。「年末の賞与の一方的反故の時も聴きました。今回は、会社が、わたくしのささやかなお願いを、これまで、嘘と苛めと、嫌がらせを繰り返さないと言う、具体的な姿勢の改善に取り組む証として、お聞き戴かなければ着地でできません」。

「……」「飛んだ飛行機は着陸しなければ墜落するか、胴体着陸しかありませんね。多くの犠牲者が出ますよ。貴方だけの責任では済まなくなりますよ。上げた拳を納めさせる方法はないのですか?」「これが、会社として出せる物です」。「最後の、と言う意味ですか」「そうです」。「では、今後起こる事に対して、全ての責任は会社にあると言う事で良いのですか? 外に相談する事もあり得ますよ」。「そう言うわけでは……」。「では、両方が打開策がないか、連休明けに連絡をしよう事で……。これは、仕事とは関係ないのですが、去年から市の助成を受けてこう言う事をやっています。ご参考にお渡し致します」と言つて別れた。渡した資料は、市の委託事業「生涯学級・障害者講座」の関係資料と、昨年、わたくしの障害者活動を報じた新聞の記事である。

### 泣き寝入りはしない

考えれば考えるほど、思えば思うほど、大きな重りが心の中に深く沈んで、一睡もできないままに夜が明けた。雲一つない晴天だ。仲間に電話して、日比谷のメーデーに行く事にした。来賓、参加者の熱いメッセージがステージの上から発せられる。会場で会った仲

間の顔、顔、顔。ビートの聴いた「インターナショナル」の演奏とコーラス。デモ行進は仲間を促されて、車に乗せて戴く。眼は虚ろで、シユプレヒコールも耳には入らない。「これで良いのか。このままで良いのか」。デモが流れ解散して、時間潰しに映画館に入っても、画面を見てはいなかった。「これで良いのか。このままで良いのか」。しかし、悔しさの思いは深くなる。同じ障害者の仲間の顔が何人も浮かんでは消えた。今夜も寝れそうにないと思ひ、続けて三本の映画館を梯子して、帰宅したのは深夜であった。

翌日、会社の考えている労務政策を、入社以来得た情報の時系列で並べて考える。結論が出た。「解雇はない。今の状況で、解雇は出せない。泣き寝入りはしない」と。腹を決めると、予てからユニオン執行委員会で確認した方針「誠意ある前向きの着地点が出なければ、ユニオンとして闘う」を実行して欲しいと、委員長、書記長に連絡を取る。了解される。地域の他のユニオンの仲間、首都圏の他のユニオンの仲間に連絡を取る。怒りの賛同を得る。三日から五日まで、全国の友人・知人に三〇〇本近い電話を入れる。中には、声を震わせて激しく励ましてくれた障害者の仲間もいた。万一解雇の場合、すぐ駆け付けてくれる仲間が、五〇人は確保できた。すぐに抗議の電話・FAXをしてくれる仲間が一五〇人は確保できた。「闘う。闘う以上は負ける訳にはいかない。やる」

勝った！

六日、いつも通りに一番先に出社した。予てから万一の為に準備していた資料を、鞆の中に仕舞った。これで準備すべて整った。人事課長からの電話を一時半まで待つ。何の音沙汰もなし。電子メールを開く。四月三〇日までの経過と内容に納得出来ない事。ユニオンに相談した事。その理由として①二月一九日の部長面談から都合七回の事前面談で、着地点が見い出せない事②本来なら、従業員労働組合に相談すべきところであるが、契約書の付帯事項として、その資格がないと、会社に規定されている事③前から、課長・部長には、問題発生のために、外に相談する旨を伝え、また、事前面談でも、人事課長に「場合によっては外に相談する事も有り得ると伝えている事を伝え、ユニオンの活動を詳述した。推敲出来ないままに、一応のメールが出来たのが、ユニオンが電話を入れる五分前の一二時五五分。急いで送信をクイックした。一時間の昼休みを三〇分終え席に戻る。部屋にまだ変化はない。そのまま一五時五〇分まで時間が過ぎた。一六時からのミーティングを前に、電話をジリジリとして待つ。五分後電話が鳴る。ユニオンからだ。「何度電話しても人事部長が捕まらず、人事課長と話しをした。課長は、誠意を持って速やかに対応しますと言ってるよ」「手はず通りにして戴きましたか」「ああやった。ユニオンと言ったら少し怯んだが、君のメールを読んでいたよ。行きなり団交と言えば構えるから、本人から聴いたところ特殊な人事制度で、良く判らないし、これまで、会社と本人の間の約束事が悉く反故されているとの事で、一度、お話しをお伺いしたい。しかし、本人と話し合う積もりなら、その結果を見てからでも良いですが、と言ったよ」「有り難うございました」勝った。差別され続けた障害者の怒りが通った。机の上に涙が一粒落ちた。

翌五月七日、九時一〇分、人事課長から電話が来た。「結論が出ました。今から時間がありますか」最後の面談であって欲しい。「部長と人事部長、担当役員と私の四人でタベ相談した結果です」。示された案は、今まで動かなかった事が、満額の回答であった。一

三時半昼休みから戻ると、人事の若い担当者から「契約書が出来ました」「解りました」。机を挟んだ若い担当者は、心なしか血の気が引いているように見え、二〇分かけての説明を受け、確認の意味で質問をする。彼の声は上擦り、ワナワナと震えている。質問で間違いないことを確認して、署名・捺印して言った。

「どう聴いて来たか知らないけど、わたくしは、我慢して、我慢してそれで筋の通らない事を許さないだけです。理由もなく、人に噛みつく気遣いではないですよ。将来のある貴方は、人の真贋と、物事の本質を、人事と言う仕事を通して、身に付けて下さい。そうしないと、この会社で泣く人が後を絶ちませんからね」。

席を立った瞬間、虚脱感に見舞われた。社員食堂で吸った煙草は、ことのほか美味かった。しかし、今、負けた会社も、問題の社会的拡がりを、一時的に消そうとしているだけだ。色々な手を打つだろう。今までより陰湿な、また、あからさまな手を打つだろう。日比谷のメーデーのビートの効いた「団結の歌」がこだました。  
(町田 一男)

## ローザ・ルクセンブルグ／ベルンシュタイン論争から百年

—ローザ・ルクセンブルグ、シカゴ会議での挨拶と問題提起—

### ローザ・ルクセンブルグ国際協会とは

まず第一に、このシカゴ会議の素晴らしいプログラムを準備して下さったB・ペルツ教授を始め、シカゴの友人の皆さんに、ローザ・ルクセンブルグ国際協会代表として、また私個人としても、心から感謝いたします。同時に、ここでシカゴの友人の皆さんに、ローザ・ルクセンブルグ国際協会についてご紹介をさせていただきます。

ローザ・ルクセンブルグ国際協会が生まれたのは、一九八〇年です。一九八〇年はまだ東西・米ソ冷戦がホットな時でした。一九七九年一二月にソ連がアフガニスタンに侵攻し、一九八〇年一月にはレーガン氏が大統領に当選して、核戦争の脅威が強まった時でした。そうした雰囲気の一九八〇年冬に、ローザ・ルクセンブルグ研究者の何人かがパリに集まって、ローザ・ルクセンブルグ国際協会の設立を話し合ったのです。

私は一九七一年以来、世界の主なローザ・ルクセンブルグ研究者と知り合っていました。特に、一九七三年九月に、イタリアの上院議員、というよりもイタリアの反ファシズムの闘士でイタリア社会党の書記長でもあったレリオ・バッソが、北イタリアのレッジョ・エミリアで一週間にわたって、ローザ・ルクセンブルグ国際会議を開催して、世界中のほとんどすべてのローザ・ルクセンブルグ研究者を一堂に集めて、お互いを結び付けてくれたのでした。それ以来、私は世界のローザ・ルクセンブルグ研究者と連絡を保っていました。そして一九八〇年冬に、パリのジルベール・バディア教授の家に集まって、ローザ・ルクセンブルグ国際協会の設立を決めたのです。

その目的は、世界のローザ・ルクセンブルグ研究者が自由に研究成果と意見を交換する国際的なネットワークを作ること、冷戦の克服と「現存する社会主義体制」の民主化を願ったのです。ルクセンブルグ国際協会の財政的基礎には、私が一九八〇年に西ドイツのダイーツ社から出版したローザ・ルクセンブルグの獄中書簡集の印税を当てました。

私たちは国際協会の設立総会を、一九八〇年九月にスイスのチューリッヒで開催しまし

た。チューリッヒはローザ・ルクセンブルクが一八歳で初めて亡命して学んだ町です。当時は世界でチューリッヒ大学だけが女子学生を受け入れて博士号を授与した唯一の大学であったということです。

国際協会の事務局長は、ヨーロッパ左翼で有名な活動家でチューリッヒで書店を営んでいたテオ・ビンクスが引き受けてくれました。テオは一九九一年に亡くなりましたが、事務局は今もチューリッヒにあります。

それ以来、ローザ・ルクセンブルク国際協会は、次のように、二・三年毎にローザ・ルクセンブルク国際会議を開催してきました。

一九八〇年九月チューリッヒ（スイス）、一九八一年九月リンツ（オーストリア）、一九八三年五月パリ（フランス）、一九八五年八月九月ハンブルク（ドイツ）、一九八九年一月ベルリン（ドイツ）、一九九一年十一月東京（日本）、一九九四年十一月北京（中国）、一九九六年九月ワルシャワ（ポーランド）。

### シカゴそしてローザ

では何故ローザ・ルクセンブルク国際協会は、今年、シカゴでこの集会を開催したのでしょうか？ この会議はルクセンブルク国際協会にとって特別な会議です。第一に、アメリカで開催するのは初めてのことですし、第二に、このようにオープンな催しも初めてのことです。

このようなルクセンブルク国際協会の初めての試みとしてシカゴを選んだのは、第一に、シカゴが世界の労働運動の発祥の地の一つだからです。一八八六年五月一日に、シカゴの労働者は八時間労働制を求める運動をスタートさせました。八時間労働、八時間の睡眠、そして八時間の自由時間―それは労働者が人間的に生きるための要求でした。しかしこの運動は血の弾圧に会いました。シカゴの労働者への弾圧は、人間的に生きることを願う全ての労働者への弾圧を意味していました。だから、「ヘイマーケット事件」は世界の労働運動の象徴となりました。私たちは今、シカゴでその歴史と意味を学んでいます。

それに関連して、私はここでローザ・ルクセンブルクがメーデーとアメリカの、シカゴの労働運動との関係について述べた文章を思い起こしておきたいと思います。ローザ・ルクセンブルクは、一八九四年にポーランド社会民主党の機関紙『スプラバ・ロボトニツァ（労働問題）』に掲載した「メーデーの起源は何か？」と題した論文で次のように述べています。

「八時間労働日を実現する手段として、プロレタリアの祝日を使うという素敵なアイデアは、初めてオーストラリアに生まれた。労働者たちは一八五六年に八時間労働日を求める意思表示として、集会やお祭りを行うと同時に、完全に仕事を止める日を組織する決定を行った。このお祝いの日は四月二十一日とされていた。オーストラリアの労働者は、最初はこの祝いの日を一八五六年の一回だけとするつもりだった。しかしこの最初のお祝いがおーストラリアの労働者大衆を鼓舞激励する強い効果を発揮したので、この祝いを毎年行うこととなった。（中略）オーストラリアの労働者の例に最初にならったのは、アメリカの労働者だった。彼らは一八八六年に、五月一日を完全休業の日と決めた。この日、二〇万人の労働者が仕事を休んで八時間労働日を要求した。その後何年も間、警察や司法の



妨害のために労働者たちはこのデモを繰り返すことは出来なかった。しかし一八八八年に彼らはこの決定を改めて行い、その翌年の祝いを五月一日に行うことを決めた。この間にヨーロッパの労働運動も強化し、その強力な表れとして、一八八九年に国際労働者会議が開催された。四〇〇人の代表が参加したこの会議で、八時間労働日を真先に要求することが決定された。フランス労働組合の代表、ポルドーのラビーニユが、各国で一斉に休業することでこの要求を示すことを提案した。アメリカの労働者代表が、一八九〇年五月一日にストライキを行う決定をしたことを伝え、会議はこの日をプロレタリアの国際的な祝日とすることを決定した。(中略)五月一日には八時間労働日の実行が要求された。しかしこの要求が実現された後にも、メーデーは続けられた。プルジョワジーと支配階級に対する労働者の闘いが続くかぎり、メーデーは毎年それらの要求の表明となることであろう」

この会議をアメリカのシカゴで開催する第二の理由は、第二次大戦以後、冷戦の中で、長い間沈滞していたアメリカの労働運動が活性化を始めたからです。アメリカは帝国主義的大国で、特にソ連の崩壊以後は、世界で唯一の超大国として世界に君臨しています。そのアメリカの内部で労働運動が活性化を始めたということは、世界の労働運動にとって、アメリカによって抑圧されている全ての人々にとって、大きな希望を与えるものです。私たちローザ・ルクセンブルク国際協会は、シカゴでこの会議を開催することで、活性化を始めたアメリカの労働運動への連帯を表明したいと願ったのです。

### ローザとベルンシュタイン

次に、何故私たちは、「ルクセンブルク／ベルンシュタイン論争から一〇〇年」というテーマを選んだのでしょうか？

たしかに一八九八年九月に、ローザ・ルクセンブルクは、「ライブチツヒ民衆新聞」にベルンシュタイン批判の論文「社会改良か革命か？」を発表してベルンシュタイン論争を開始しました。それから丁度一〇〇年になります。

しかし私たちは、一〇〇年という歴史だけでこのテーマを選んだわけではありません。ベルンシュタイン論争のテーマは、依然として今日の問題であり、二十一世紀の労働・社会運動の問題でもある、と考えるからです。ルクセンブルク／ベルンシュタイン論争とは、どんな論争だったのか、簡単に振り返ってみましょう。

まず最初に、よくある誤解を解いておく必要があります。それは、ルクセンブルク／ベルンシュタイン論争の中心テーマは、「社会改良か、革命か」の選択で、ベルンシュタインは社会改良を主張し、ルクセンブルクは革命を主張した、という誤解です。

ベルンシュタインは確かに「社会革命」を拒否して「社会改良」を主張しました。「究極目標とされるものは私には無であって、運動がすべてだ」という有名な言葉が、それを象徴的に示しています。それに対してローザ・ルクセンブルクは、「社会革命」と「社会改良」を分離して対立させることに反対したのです。「社会改良のための闘争は社会民主党の手段であり、社会革命はその目的なので、社会民主党にとって社会改良と社会革命とは不可分の関係にある」と。だからローザ・ルクセンブルクは、「社会改良か、革命か？」と論文の表題に疑問符を付けたのです。

ベルンシュタインの主張は、次の三点に要約されます。

一、経済的にみて、資本主義はそれ自身の矛盾のために内部から崩壊し、社会主義が必然的に生まれるというマルクスの理論は間違っている。何故なら、資本主義が信用・カルテル・トラス・交通運輸機関などの適応手段を発展させたことで、全般的恐慌の可能性が無くなったからだ。

二、政治的にみて、社会民主党と議会活動や労働運動・消費者・共同組合運動などの活躍の結果、労働者の生活と権利が向上したので、社会主義への道は革命とプロレタリア独裁によつてのみ開かれるというマルクスの理論は、古くなった。

三、従つてドイツ社会民主党は、究極自的としての社会革命を追及するのではなく、日々の社会改良に活動を集中すべきだ——「究極目標とされるものは私には無であつて、運動がすべてだ」と。

ベルンシュタインは晩年のエンゲルスと親しく、従つてベルンシュタインの言葉はエンゲルスの遺言のように権威のあるものと見られていました。一方、ローザ・ルクセンブルクはドイツ社会民主党に参加したばかりの、ポーランド出身の国際的に無名な二十七歳の女性でした。無名の女性が社会主義運動の権威を真正面から批判して挑戦したのです。

ローザ・ルクセンブルクは、ベルンシュタインの主張を次のように批判しました。

一、経済的にみれば、ベルンシュタインの指摘通り、資本主義の適応手段は発展しているが、そのような資本主義の安定装置は弁証的に機能して、資本主義の無政府の拡大、生産過程の社会化の進行、労働者の組織と階級意識の発展をもたらすことによつて、資本主義の矛盾をいっそう深めるので、社会主義の歴史的必然性はマルクスの指摘通り依然として資本主義に内在している。

二、政治的にみて、改良の進展も国家の性格を変えるものではない。「現在の国家は〈労働者階級の向上〉を意味する〈社会〉ではなく、資本主義社会の代表者、つまり階級国家だ。従つてベルンシュタインの言う社会改良とは、自由な労働集団が自分自身の労働過程に対して統制を行うことではなく、資本の階級組織が資本の生産過程に対して統制を行うことで、資本の利益が社会改良の自然的限界なのだ」。

三、ドイツ社会民主党は社会革命を追及するのではなく、日々の社会改良に活動を集中すべきだ、というベルンシュタインの提案は、「社会民主党の終極の目標である社会変革を放棄し、社会改良を階級闘争の一つの手段から目的へと転ずる提案」であり、「あれこれの闘争方法、あれこれの戦術が問題なのではなく、社会民主主義運動の存在そのものにかかわる問題なのだ」。

四、ベルンシュタインが言わなかったことをローザ・ルクセンブルクは指摘した。それは「世界政策」(帝国主義)と軍国主義と民主主義との関係で、「世界経済の形成と世界市場での競争戦の激化と一般化とは、世界政策の道具としての軍国主義を大国内外活動の指導的モメントにした。世界政策と軍国主義が現段階の向上的傾向だとすると、当然、ブルジョア民主主義は下降戦をたどらざるをえない」と。一九〇〇年九月のドイツ社会民主党マインツ大会とその直後の第二インター・パリ大会以来、ローザ・ルクセンブルクは一貫して、帝国主義による世界戦争の危険性を警告し、世界平和のための労働者の国際的連帯と統一行動を呼びかけ続けたことを、ここで想起しておきたい。

## 「資本の野蛮」と二一世紀

それから百年が経ちました。ローザ・ルクセンブルクとベルンシュタインと、どちらが正しかったのでしょうか。この論争のほぼ二〇年後にロシア革命が起こって、社会主義が生まれたという意味ではローザ・ルクセンブルクが正しかったのでしょうか？ それとも、その社会主義が崩壊して、今日、資本主義が世界を支配したという意味では、ベルンシュタインが正しかったのでしょうか？

ちなみに、つい最近のある朝、私は新聞を開いて驚きました。「革命、起こる」と特大の活字が紙面いっぱいに踊っていたからです。それはノン・バンクの宣伝広告でした。

「革命」は今や、資本主義の牙城、金融界の「お好みの言葉」であるようです。

そうであるだけに、私たちは今日、本当の意味での革命を本来の正しい位置に置き直さなければなりません。その意味では、ルクセンブルグ／ベルンシュタイン論争から一〇〇年後の今、私たちはこの論争の原点に戻ったのではないのでしょうか？

かつて私は、この論争におけるローザ・ルクセンブルクの主張の意味を、「革命と弁証法の復権」と呼んだことがあります。ポーランド生まれのユダヤ人で障害者の女性という三重・四重の差別と抑圧を背負っていたローザ・ルクセンブルグにとって必要であったのは、世界の部分的な改良ではなく本質的な転換、つまり革命でした。そしてその革命を実行する不可欠の道具が弁証法でした。ローザ・ルクセンブルクは、弁証法によって、世界を変革する方法を解明したのです。

例えばローザ・ルクセンブルクは、一九一三年に「資本蓄積論」を著しました。この本は、資本が世界の隅々まで浸透して人々の共同体と暮しを破壊していく姿を生き活きと描いています。そしてその果てに、資本は全世界を食べ尽くして、最後は資本によって苦しめられた者たち（抑圧された第三世界の労働者）たちによって倒される、と見通しています。この見通しはまだ実現していませんが、それはこの過程がまだ進行中であることを示すものではないのでしょうか？

また例えばローザ・ルクセンブルクは、一九一八年に獄中で、「ロシア革命論草稿」を書いて、レーニン・ボリシエビキの社会主義革命を、下からの民主主義の発展を妨げる恐れがある、と厳しく批判しました。下からの民主主義の発展を伴わない社会主義は、人々に幸せを保証せず、従って歴史を生き延びることは出来ない、と考えたからです。

ローザ・ルクセンブルクはまた、第一次世界大戦を実際に目前にして、資本主義が存在する限り、人類は結局は「野蛮」に落ちるほかはない、という見通しをもって、「社会主義か、野蛮への転落か？」というテーゼを立てました。このテーゼは、一八九八年の「社会改良か、革命か？」に呼応するテーゼであったのです。

今年、マルクス・エンゲルスの「共産党（主義者）宣言」から一五〇年に当たります。イギリスの優れた歴史家ホブスボウムが、「共産党（主義者）宣言」の新版に序文を寄せて、その最後を次のように結んでいます―マルクスの「共産主義者宣言」からかなり後に、「別のマルクス主義者は（マルクスの問題提起を）社会主義と野蛮の間の選択と言い換えた。社会主義と野蛮のどちらが勝かは、二十一世紀に回答が残された課題である」と。二十一世紀に、私たちが「資本の野蛮」に抗して、新しい「文明の時代」を開くことが

出来ないならば、私たちは本当に「資本の野蠻」とともに滅びることになるでしょう。

一二〇年前にシカゴの労働者たちが望んだように、このシカゴから二十一世紀に向けて、人間一人一人が差別も抑圧もなく、人間らしく働ける新しい社会への一步を歩みだそうではありませんか。

(一九九八年五月二日 伊藤 成彦)

## 「弁証法」の駆使！

—いま、なぜ、ローザか？— 第九回国際交流参加—

♪わたしの摘んだ この花束は／再三あなたに 挨拶をする／わたしも 幾度もおじぎをする／それこそ 幾度も 幾度も／そして花束を 手にとり上げて／幾度も 胸に抱きしめた♪

このうたは、歌曲になったゲーテの詩であるが、ローザ・ルクセンブルグが獄中でよくハミングしていた(『ローザの手紙』「岩波文庫版」から。大内兵衛氏の名解説も付いている)。この手紙集を読むと、愛あり、自由あり、自然あり、そして革命がある。ローザの豊かな人間性を偲ばせる。大内さんは、女性にすすめる最上の書と述懐されている。なお、すばらしい絵画も残されている。

ローザといえば、まず虐殺されたこと、ドイツ共産党の最左派(スパルタクス団)に属していたこと、レーニンと対決したことなど、とかくハードな部分が伝えられてきたが、伊藤さん流に言えば、ローザは弁証法を体得していた。

**伊藤氏の功績** この度、伊藤成彦教授(中大独文・ローザ国際協会会長・沖縄共闘顧問・著書に「ローザ・ルクセンブルグ」等多数)から、「ローザの国際交流あり」との呼びかけに応じ、沖縄共闘のご縁もあり、学者一行に加えてもらった。日本代表は十二名。伊藤団長に、加藤哲郎一橋大学教授ほか滝沢東北学院大教授・河野東洋大講師、沖縄のローザ山里節子島嶼(とうしょ)学、同じく安里栄子民族学探求の市民運動家等。

日程は、四月三〇日～五月四日、於シカゴ。主テーマは「労働と社会主義・ローザとベルンシュタイン論争から百年」。

このローザ国際交流は、彼女の亡命先のスイスのチューリッヒで第一回が持たれ(八〇年)、いろいろパリ→ハンブルグ→ベルリン→東京→ワルシャワと開催し、第九回目が今回のシカゴとなった。伊藤氏自身は、七一年来、国際交流を深め、イタリアの革命家レリオ・バッソンの画期的ローザ会議にも参画、八〇年に会長に就任自らのローザ書簡集の印税も当てている。

「いま、なぜ、ローザか？」は、ローザの反搾取、反差別、弁証法、(伊藤会長の強調「民衆からの運動」…)などからで、「なぜシカゴか？」については、シカゴは、被抑強圧・虐殺の歴史の共質性→メーデー発祥の地、アメリカ労働運動蠢動記などの理由による。それらの紐帯の意義は内外で浸透しよう。私自身は、それ以上の収穫がとくに哲学的にあつた。

さて本会議だが、伊藤会長が、主テーマの「ローザとベルンシュタイン」について、開会挨拶を兼ねて主報告。通訳態勢の関係もあり事前配布の日本語(全文は本誌別項参照)によって文責筆者、私見も交え次に要約する。

ローザは、経済・政治について、▽資本主義における生産の無政府性と社会化は、自らはらむ矛盾によって、政治の社会化をもたらす（弁証法）、併行して民衆の意識と組織化はすすむ。▽「改良」は、資本の利潤追求によって、逆に民衆への統制をもたらし、階級国家は変えられない。▽ドイツ社民は、「改良」という闘争手段を、目的化してしまった。「改良か、革命か？」（ローザのベルンシユタイン批判の名論文）ではない。ここでもローザの弁証性が活かしている。▽世界市場での競争は、どうしても軍国主義を駆使するようになり、ブルジョア民主主義を下降させる。そして戦争の危険を絶えず内包する。

また、ローザは獄中で「ロシア革命草稿」という歴史に残る論文を仕上げ、革命の先輩（年齢は同じ）であるレーニンに対論したことは、まず「言葉の交え」（ディアレゲスタイ）から始まるという大原則からいって高く評価される。官僚主義は、デイベイト（討論）の貧困からきており、今も日本の左翼に尾を引いている。その意味からも、今、ローザの作風（モノを言おう・弁証性）に見習わなければならない。

また、有名な「資本蓄積論」で、搾取は、各国の隅々まで、共同体や暮らしを破壊し、そのために矛盾は激化し、とくに第三世界の人民によって（筆者注・アメリカなど各国に拡散させられ差別させられている「黒」人等のカラードの勃興は強く、今回の渡米の強烈な印象である）。

以上の諸分析・判断は、ローザが弁証法を体得し、これを駆使していたと言える。伊藤は、ローザによる「革命と弁証法の復権」と規定した。「革命を實行する不可欠の道具が弁証法」であった。ローザはユダヤ出身で、身障者（脚）で、女性という三々四重苦などの差別で、彼女にとっての窮極は、社会の本質的転換＝「革命」であった。「改良」は一手段にすぎなかった。以上は、ローザの弁証法による分析であり、実行であった。

あと、ドイツ人代表二人から「ローザとメーデー」、「蜂起とローザの政策」、アメリカ代表から「ローザの精神」、「マルクスの問題・労働者階級の闘争・社会主義の願い」、韓国代表から「世界化の下での蓄積と労働」の五つの報告があった。相互討論は、それほどなく私も通訳態勢の不十分さで、これ以上の報告は、いずれ発表される協会報告に依拠せざるを得ない。

会議そのものは全一日で、あとの二日は現地諸行事の参加で、その一つは次のシカゴメーデーである。

シカゴ「メーデー」！ローザ交流と併行して、シカゴ「メーデー」との交流がありこちらも強烈な印象であった。全米の左翼関係者一千人が糾合したのだ。共産党から黒旗掲げでのアナーキストまでの統一戦線の結集であり、セクト（非弁証性）の強い日本では見られない印象で高く評価したい。

これらも、米国左翼における弁証法の浸透によると判断したいのは、背景にある理論的・哲学的指導をしている諸団体が「弁証法と革命」などの命題で講座や発刊や発言などをしていなのだ。

その中身は、M・E・Lからヘーゲルに遡り、さらにカベ崩壊後の、フランス哲学を絡ませている、サルトル（個の実存の自由）からデリタ（伝統の転覆）などを中心に、アドルノ（否定の弁証法）、ルカーチ（芸術的個性）、ファンン（黒い革命家）など、何れも根茎にギリシヤ以来の弁証法が根を張っており、日本哲学界が半可通に扱った関係主義なども

發展的に討論中だ。

このような「綱領」があつて全左翼の戦線がある。この「ハイマーケット」事件追想と再起の結集は、世界各国メーデーの元祖でもある。一八八六年五月一日に、「八時間労働」等を掲げて全米的にゼネストがあり、シカゴでは警官の銃撃から民衆の反撃もあり、労資で十一名死亡（爆発もあり、真因今もって不明）、支配層は「革命だ」と、何と戒厳令をしたのだ。そのためにリーダーの四人の絞首刑があり、第二インター結成時にエンゲルスらの指導で五月一日をメーデーとし、全世界に浸透していった。日本は、その二十四年後（大正九年）、上野で開催、水沼ら逮捕。

ゼッケン・アメリカを行く この実質シカゴメーデー、犠牲者〓絞首刑のアルバートと妻ルシーらの銅像前で挙行され、私は歴・研から入手した美しいルシーのポスターをいつものように胸にぶら下げ、ゼッケン、「アメリカを行く！」。多くの人々（リンカーンの言うあの「People」）がたくさん握手にくる。チラシを手渡してくる、Tシャツ（THE DAY WILL COME! などと刷り込んだ）を三ヶ所で贈らる、取材にくる…。私は手作りの、「沖繩解放!（LIBERATION!）」とか、「ひげ根!」（RHIZOME・フランス哲学）と刷りこんだコピー名刺を撒布。片言の交互作用したり、時に抱擁したり…。感激の極みで交流を重ねる。黒旗グループが、骸骨踊りをする。そのまわりを警官がにらむ。物販（パンフ・バッチャが主）の机が各所に。アイスクリーム屋には幼児が列をなし、ゴザしいての家族団らんあり、手をつなぐ恋人同士あり、そして集会の中心では、葬送曲で合唱隊など、全体が正に真実感溢れる「メーデー」である。日本ではほとんどなくなっている弁証性ある左翼集会であつた。

伊藤会長も、シカゴの虐殺の非道さとその後のアメリカ左翼の歴史、今日の「ハイマーケット結集」について、「最も印象に残つた」と述懐されている（「フォーラム90S」五月二五日号）。ローザ研究の第一人者として、あのローザの虐殺（ドイツ憲兵が銃床で殴り殺し、エルベ川へ投げ棄てた）などと、シカゴの千人の虐殺などが重なつたであろう。私には、ルシーの容姿が、ローザと重なつて仕方なかつた。二人とも「その日が、何時かは」：（THE DAY WILL COME!）と呼びつつ逝つたであろう。「叛」（「怨」ゆえに〓私の沖繩スローガン）を再決意する。シカゴで…。今回、意義あるアメリカ行きであつた。

伊藤教授の名著「ローザ」も再読し、日本の多くのジャンヌの女性の皆さんも叙述したい。安保で虐殺された樺美智子等を追悼する集会も潮流を越えて続けたいものである。過去は、未来への大道を指し示す。

アメリカは旅行などで行きたくない国の一つであつたが、全米左翼の機微にふれ収穫大である。二万人の労働者党员を紐帯する「労働党」や、七五年の歴史をもつ「反戦同盟」とも交流し、「戦争責任はモノポリ（独占資本、久しぶりにきく規定）など支配層にある」とニューヨークで聞いた。元特攻隊の卵（十六歳）だった私の自虐に「反戦」氏の怒気含めて激励に感激。惧（おそ）るべきはわれら弁証法の貧困!。

革命はアメリカ環から! 最も強く感じたことは、「革命はアメリカから」ということであつた。「黒」人（アフロ・アメリカン）中心の革命である。各界に彼らの進出はめざましく、あらゆる場所でも彼らのエネルギーを強力に感ずるし、白人や第二の白人と批判

されている日本人等は、小さくなっている。一つの統計は、何年か後に、人口も「黒」が多数になる」（伊藤氏談）実態でもある。差別言動ではなく、三K労働は「黒」人が圧倒的であり、居住、乗り物、レストラン、教会、観劇、結婚から諸コミニケーションにいたるまで、人種差別は、程度の差はあるが、根深い。権力の中枢ワシントンでは、現在、「黒」人の方が多い。それと、環境・反原発・反戦などの市民運動から、宅配等労働組合（UPS）の勝利、港湾労組の頑張り等とも相乗しよう。被差別の白人共々…。「嶺」からこちらの統一戦線で！。

世界革命は、矛盾がうっ積している国から環が切れる。今度のアメリカ行総括から、「革命はアメリカから！」と痛感している。（佐々木 守雄）

## 「五・二八判決」は司法の自殺

—雨の中、国労支援の地域集会—

「東京地裁不当判決をはねかえしJR採用差別事件の全面解決を求める十勝集会」（平和運動センター十勝ブロック協議会主催）が六月十五日、帯広市内の寿御苑で開かれ、雨の中、集会は支援の労働者・市民約四百人が結集した。

主催者の村上慧議長が「判決は労働者を愚弄したもので、怒りを覚える。国労の闘いを最後まで支援しよう」と挨拶した。

後援の「JRに人権を！ 国鉄闘争を勝利させる十勝連帯する会」斉藤道俊代表は「こちら側に間違いなく正義がある。あきらめずに頑張ろう」と激励した。

続いて、国労顧問弁護団の後藤徹弁護士が、国鉄分割・民営化の経過を振り返り、東京地裁の判決は「中間判決を明言しながら終局判決だった。不当労働行為の事実認定を全くおこなっていない。国労組合員という理由だけで不採用になったのは調査や証言から明らか。

国会審議、労働組合法を無視し国家的な不当労働行為を裁判所が認めたもので司法の自殺」と批判。「この闘いは、労働委員会の存在が問われている。東京高裁の場で問題の本質を改めて浮き彫りにしたい。このまま引き下がったら闘争団・家族の十一年は何だったのか、日本の労働者にとって何だったのか。運動の力で全面解決を勝ち取ろう」と問題提起した。

国労釧路地区本部の鏡力雄書記長は「闘争団だけの問題でなく日本の労働者のためにも控訴して闘う」と支援を訴えた。

国労帯広闘争団の白木利明団長は「支援に応え、勝利するまで闘い抜く」と決意表明した。（国労帯広闘争団・佐野 周二）

## ◇読者からのおたより◇

リストラに負けない心得四ヶ条 一条 退職届は絶対に書かない／社長や上司から強要されても絶対に書かない。書いたら負け。解雇は会社と争えるが任意退職ではダメ。解雇のほうが雇用保険の受給も有利になる。二条 労働条件の不利益変更は拒否しよう。／一方的な出向、配転、賃金切り下げ、退職金の引き下げはゆるされない。三条 リストラは必ずやって来る。今から準備しよう／

リストラのない会社はありません。いざというときのために就業規則、退職金規定、二年前からのタイムカード、給与明細書を準備しておこう。これが反撃の武器。四条　あなたが思うほど会社はあなたを愛さない／「家庭を犠牲にしてまで会社につくしたのに」「自分のがんばりで会社は大きくなったのに」「会社の発展は君のおかげ、君が頼りだと社長はいつてたのに」とはリストラ社員  
のグチ。  
(八王子ユニオン)

編集部より　丸ごと解雇の例がふえています。このノウハウご利用を。

**仲間と勉強**　国鉄闘争特集(第七〇五号)、多数おくっていただき、仲間と勉強しました。少額ですがカンパします。滝野さん他、皆様のご健闘祈ります。  
(岡山・K)

編集部より　カンパありがとうございます。通信」お役に立てていただき、感謝。

あなたがいて、私がいる　「あなたがいて、私がいる」。そんな関係の社会通信。ますます輝いてください。私は比例区予定候補として東へ西へ走っています。  
(鳥取・山田篤)

編集部より　ご多忙なのに嬉しいおたよりいただいて。いよいよ本番、勝ちましょう。

**近づく参院選**　参院選が近づいてきました。私は長い間の闘病で、地元友人、知人、言葉交わす人はだれもいません。周囲に拡がらない一票です。でも大切にします。  
(板橋・M)

編集部より　体調いかがですか、時代もこれから大きく変化し、楽しみも高まるかと思われまうどうぞご自愛を。

「かまえ」　五・二八東京地裁不当判決、資本・権力の「かまえ」を見た。負けられない、決意を再度かためる。  
(北海道国労・K)

編集部より　国家権力はいかなるものかを改めて思い知らされました。議会制民主主義の姿は変わっても、国家権力の本質は変わりません。

**躍進を**　「リストラ」、「ビッグバン」など資本に便利なカタカナ語により、首切り合理化や金融経済破綻で国民大衆がその負担を受けるのが当たり前の政治の進行に、憤懣やるかたない怒りをおぼえる今日この頃。自民党政権に対して野党がない政界といっているほど「平穩無事」な政治の流れに不安がつのるばかりです。今こそ勤労者や高齢者の生活を守るため参院選で新社会党の躍進を勝ちとりましょう。  
(北海道名寄・二郎)

編集部より　北海道では新社会党の支持がひろがっているようですね。さらにご健闘を。

**国労との共闘・連帯**　五・二八東京地裁不当判決を許さず、国労との連帯を強化し、労働運動の新しい歴史を切り拓こう。そのためにも日常的な職場の点検・摘発活動を強め、権利の擁護・確立を！  
(東京・Y)

編集部より　五・二八判決は労働委員会制度、戦後労働法制に引導を渡してしまいました。国鉄闘争発展の条件をつくったのです。支援から、「連帯・共闘」へです。

**飯豊(いいで)から米沢へ**　期待に胸を膨らませて、飯豊山麓中津川地区に勇躍いったのはよかったです。第三セクターの「緑のふるさと公社」より管理委託を任された釣り堀が飯豊町の公共施設であったがために、飯豊町側から、さまざま注文がつけられました。そこで、きっぱりとこの釣り堀の管理棟をあきらめ、心機一転、米沢市内に活動拠点を移すことにしました。口さがない人からは、「出戻り」などといわれるかもしれませんが、たこつばに入って飢え死にするよりは、一歩前に打って出た方が、展望は開けると確信しています。  
(米沢・松島秀次)

編集部より　飯豊に行きたかったのに。がんばって。どこも不況の嵐ですが。  
**テレビニュースで富国生命のたためさ**　富国生命が行っている、望月さんに対する「自宅就労命令」の不当性が、テレビで放映されました。放映されたのは五月十三日午後五時からテレビ東京系列の「夕方いちばん」というニュース番組。テレビ局のスタッフが自宅就労場所である望月さんの自宅を訪ね、約五分間に渡り、会社の不当きわまりない命令がいかに人権を抑圧しているかを、望月さんから聞き出し、その不当性を明らかにしました。また、同テレビ局では、富国生命に対して、(望月さんの)自宅就労問題に関して取材を申し入れましたが、これに対して会社側は「そんなことは、答える必要がない」という旨の発言を行い、取材を拒否したということ。そして、なんと会社は、その後テレビ局に放映を止めるように圧力をかけたという話まで伝わってきています。いま、経営の透明性と経営内容の公開が求められている生命保険相互会社であるにもかかわらず、今回のことのように閉鎖的で会社の論理をこり押しする富国生命の姿勢は、今後いつそう強く批判されなければなりません。  
(支援共闘ニュースNo.7)

**拡大とご送金のお願い**　働く者の情報交流誌として二十一年、社会通信はその実績を活かし頑張っています。拡大して戴きますことお願いいたします。ご住所等連絡いただければ見本誌送ります。